

＜産地レポート＞

あじさい新品種「きらきら星」で 栃木の鉢物産地を活性化

栃木県農業試験場
研究開発部花き研究室

主任研究員 小玉 雅 晴

栃木県におけるあじさいの鉢物生産は、鹿沼市と真岡市を中心に30年ほど前から盛んに栽培が行われています。あじさいは、日本が原産で馴染みのある花ですが、最近では特徴的な珍しい花形や花色を持つ品種が次々と開発され、母の日の贈答用として人気の高い鉢花となっています。

栃木県農業試験場では、八重咲きの特徴を持つ新規性の高いあじさいの開発を目的に育種に取り組んできました。2010年には新品種「きらきら星」を品種登録出願し、2015年に品種登録となりました。きらきら星の主な特徴は、①八重咲きで装飾花が大きい、②花色が複色でピンクまたは青に白い縁取りが入る、③装飾花の縁が細かに切れ込むなど、瞬きながらきらきら輝く星を連想させる花姿をしています(写真1)。

このきらきら星の生産は、栃木県内の鉢物生産者が組織する栃木県鉢物研究会員限定とし、16名で生産を開始しました。きらきら星の登場は、新たな鉢物品目としてあじさいの導入を推進する契機となるとともに、生産者間で出荷規格の統一を図るなど産地として活発な取り組みが行われるようになりました。

特に、あじさいの鉢物生産では、規格品として花色を安定させて栽培する技術が求められます。生産者で組織する「きらきら星部会」では、品種のブランド化を目指し、規格品生産のための品種特性の把握、育苗方法や摘心時期の検討など、栽培技術の習得のために農業試験場や生産者ハウスでの勉強会を熱心に重ねてきました(写真2)。これらの取り組みにより部会では、栽培条件の違いによる花色の変化を抑え、鮮やかな発色が得られる「きらきら星専用培養土」を作り、統一して使用することになりました。培養土は、赤玉土やピートモスなどの配合比率、基肥に加えるロング肥料の種類や量などを検討し、試作を繰り返して完成させました。

きらきら星は、2013年から本格的な生産出荷が開始されています。部会では、オリジナルラベルの作成や販売促進に向けた積極的な取り組みが行われています。新品種のコンテストでは、ジャパンフラワーセレクション、園芸文化協会会長賞を受賞するなど、市場、販売店、そして消費者から広く高い評価を得て、今を輝く品種へと成長しています。地域創生が話題の今、栃木オリジナルの「きらきら星」が鉢物生産の原動力となり、栃木の産地が益々元気に輝きを増しています。

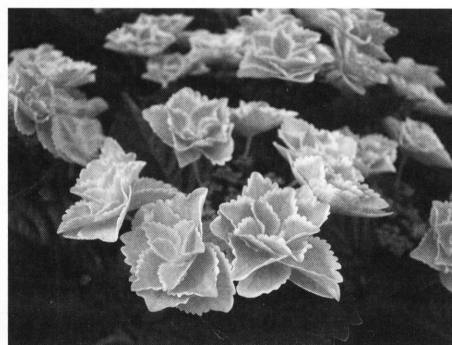


写真1. 栃木県育成あじさい「きらきら星」



写真2. 出荷規格の検討会